

皆様、人間の知恵がもうこれ以上愚かな迷いを続けぬように、今、改めてこの見落とされた一つの真理に心を向けようではありませんか。といっても、それは、月の裏側を見るほどにむつかしいことではありません。ただ、謙虚な気持ちになりさえするならば……そうです。もしも、あなたが、それを謙虚な気持ちで学びたいと望むなら、冷たく澄んだ秋の夜空の星々が、また、野に茂る秋の七草が、そして、あなたのお家の庭の片隅で、コロコロとすだく秋の虫が、あなたにそっとそれを教えてくれるでしょう。

天地万物が……心ない天地あめつちの森羅万象でさえもが、それを知っているのです。ただひとりそれを知ろうとしないのは、わずかな人知の成功に思ひ上がった傲慢な人間だけのようですね。

では皆様、また来週まで、ごきげんよう

さようなら。

第十八話 驚いてみたい！

国木田独歩の小説の中に、次のような短篇ものがあつたと記憶しています。なんでも数名の青年たちが集まって、座談に花を咲かせているところでした。そのうちにひとりの青年が言いました。「君たち、今、一番なにがしてみたいと思うかね。」次々といろいろな答えが飛び出しましたが、最後になにも言わないひとりの青年に皆が尋ねました。「君はなにがしてみたいことがないのかい。」その青年は、そう言われてゆううつそうにただ一言答えます。「僕かい、僕のことはいことはただ一つ、それは『驚いてみたい』ということだ。」と。

「驚く」！　そういえば現代人は「驚く」ということをどこかに置き忘れてしまったようですね。フン、となにを見ても鼻先で軽くあしらってしまう不感症、それも現代病の一つかもしれない。

現代人の目からは、とにかく「不思議」というものは影を消してしまったようです。昔はいろ

いろいろな不思議が多かったようですが、「幽霊の正体見たり枯尾花」で、不思議と思ったものが科学的に研究してみると、不思議でもなんでもない至極あたりまえの、天然自然の現象の一つなのだとなつて、科学的な知能が発達した現代人には、すべてのものが自然の法則というわくの中のできごと、何一つそれからはずれたものは、言いかえれば非科学的なものは存在しないのだという考えが、すっかり植えつけられているようです。だが、驚くことを忘れた気持ちは淋しいと思います。驚いてみたい！素直な気持ちで、アツと驚いてみたいと言った、あの独歩の小説の主人公の気持ちに、私も同調できるような気がいたします。

ところで、科学の発達した現代では、もう私たちを驚かせてくれるものはなにも一つないのでしようか？ あらゆることが、なんの不思議もないあたり前のことばかりなのでしようか？

皆様、今は秋です。やがて万物死滅の相をとる暗い冬が、ほんとうの空をおおうことでしょう。しかし、それから数カ月、やがてまた、一陽来復の春が……うらかな春がやって来ますね。そして、東北の野や山にも短い期間ではありますが、短いだけにその短い春を思いきり楽しむとするかのように、色とりどりの花が咲き乱れます。春になったら花が咲く！……これはきわめて当然なことですね。それこそ自然の法則のわくの中のできごとに違いありません。けれど皆様、かりにですね、地球上が植物もなにもない荒涼たる荒野原であって、皆様の中のどなたかが、

始めて一番最初の花を見つけたとしたら、どんなに驚かれることでしょうね。まして、思わずその花を手にとって見て、その花弁の中の生命の神秘に気がついたら、どんなにか驚かれるに違いありません。けれど、毎年毎年、春になったら花が咲くのだということになると、それはもうあたりまえのことになるのです。そして、言うのです「春になったら花が咲くのはあたりまえだ！」と。けれども最初のただ一度が驚くべきことであって、それが繰り返されたなら、もう別に驚くべきことではないというのは、どういう理窟でしょうか？ ただ一度のことが驚くべきことであるなら、それが一度ではなく、毎年毎年繰り返されるということは、なおさら驚くべきことではないのでしょうか？

さて皆様、「驚き」とは、思いがけぬものを発見したときの、あるいは予期したものではあっても、それを思いがけぬ所に、思いがけぬ時に見出したときの、心のときめきを意味します。ところで、野に咲く可憐な草花の一つ一つに、私たちは何を見出すでしょうか？ 科学者の、驚くことを知らない科学者の、冷静なひとみを開いて、一本の野の草を解剖してみましよう。

まだ堅いつぼみである間は、小鳥などに傷つけられないようにと、ちょうど姫君に仕える騎士のような力強い萼がそれを守っていますが、やがて、つぼみは成長して美しく開花します。どん

て、その花独特の芳香を持った、かぐわしい蜜に仕上げるのです。草の茎は実ははりっぱな砂糖工場だったのです。こうして、おいしい野の蜜を用意して蜂やちょうなど、野の賓客を招待しますが、ごちそうになった小さな客たちは、そのお礼にと花粉の交配を手伝うのです。

ところで皆様、あなたの科学者としてのひとみが、解剖のメスを追ってそこまで一つの花の神秘の扉を切り開いたとき、その切り開かれた神秘の奥底で、じーっとあなたを見つめている一つのものに、つき当たったことにお気づきになりませんか？ いや確かにあなたは、それに気づかれたはず。あなたが真の科学者であるなら——世の中にいかなるできごとも、それに相当する原因なしには起こり得ないと信ずる冷静な科学者であるならば、あなたの目は、否でも応でも、その一つのものを見出し出されなくては。そう、あなたは「そのもの」を見ました。そのものはまたたきもせず、じーっと、切り開かれた草花の生命の神秘の奥底から、あなたの目を見つめています。「そのもの」はあなたの科学する心が、「そのもの」を見出すことを待ちわびていたのです。あなたのひとみと「そのもの」のひとみと、目と目とが、ピタリと合いましたね。けれど、そこであなたはちょっと、戸惑いをして少し困って目をそらしました。あなたの心を追いかける「そのもの」のまなざしを振り払うように、頭を振り手にした花をポトリと地面に落として、あなたは、そっと、そこを立ち去ろうとします。だが、いけません。どうか、お待ちなさい

な巧みな織姫も作れぬ柔らかな膚ざわりと、美しいニュアンスに富んだ色調の、その花弁を、そっと押し開いてみますと、おしべとめしべに花粉がこぼれて、そこに花の生命のいとなみの神秘が潜んでいます。と、フト、どこからかえもいわれぬ芳香が漂って来ます。そう、それは、そのはなびらの底にたくわえられた芳わしい蜜のかおりです。と、その蜜の甘いかおりに吸い寄せられるように、一匹の蜜蜂が飛んで来て、喜びに羽をふるわせながら、花弁の中に頭を突込み、むさぼるように蜜を吸います。が、やがて片時の後には蜜蜂は他の花に飛び移って行きました。花は、それで目的を達したのです。蜜のかおりのわけがわかりました。ご覧なさい。蜜蜂はちゃんと、その小さな足の裏に花粉をつけて、それを隣りの花に運んだのです。こうして蜜蜂やちょうちゅうなどの小さな協力者のおかげで、おしべとめしべの花粉の交配ができ上がり、やがて子房の中に種が宿ります。短い春を美しく飾ってくれた花々は、やがて色あせ枯れ落ちますね。しかし、その時にはちゃんとtribeに、次の春のためのしたくができ上がっているのです。

蜂やちょうを招き寄せるための、あの甘い蜜を草花はどのようにして作るのでしょうか。もう少し科学的な研究を続けてみましょう。葉のもっている葉緑素という力が、空気中から炭酸ガスを吸い込み、地中から草の根が吸い上げた水分と合して含水炭素を作り、それを澱粉化し糖分に変化し、その草花が数万年昔、先祖から受けついだ秘伝ともいえるべき、特殊な材料をまぜ合わせ

い。この貴重な一瞬を取り逃してはいけません。待ってください。そして、少し考えてください。私は先週「もしあなたが、あなたの知らねばならぬ、たった一つのことを、謙虚な心で学びたいと望まれるなら、秋の七草があなたにそっとそれを教えてくれるでしょう。」と申しました。花はこう言っているのです。

「どうです？ 私は賢いでしょう。私の子孫を残すために、私はあなたの想像もできぬようなすばらしいことを知っています。だれがそれを教えてくれたと思いますか？」

さあ、今度はあなたのお答えになる番です。この小さな名も知られぬ野の草花の一つに、こんなすばらしい賢さを与え、こんなに大事に守り育ててくれるものは、いったい何ものなのでしょう？ 花びらの奥底の「そのもの」は、あなたをじっと見つめながら、あなたの答えを待っています。あなたは必ずお答えしますね。

「何だか、よくわからないけれど、それは人間の知恵をはるかに越えたはてしない知恵を持つものだ。そして、それは人間の知恵のように冷たく、とぎすまされたものではなく、暖かな、限りなく暖かな愛に包まれた知恵のようだ。」
が、そこで、あなたの科学者としての傲り（おごり）はちょっとつまずき、そして、あわてて言い足しません。

「だが、何にも不思議はない。それが大自然の摂理というものなんだから——」と。

大自然？ よろしい、名前などはどうでもよいのです。けれど、あなたのいう大自然が、すばらしい知恵と限りない愛情とを持っているということは、絶対に疑い得ないことです。知恵と愛、……私たちは人間の魂の問題のところで、この二つこそが魂の持つ霊的活動の能力だと考えました。そうです。この大自然——とあなたが呼ばれたものは、知恵と愛とを持つ限りない霊的主体なのだということになります。ところで、なぜ……なぜ、それを「神」と呼んではいけないのですか。私たちが何気なく足の下に踏みしじろうとした野の草花の一つを手にとり、この小さな草花の一つ一つでさえもが、目には見えぬ神の限りなき知恵に導かれ、限りなき愛情にみとられてあることを知り、その草花の一つの中にも、神の創造の御手の跡があまりにも歴然と印されていることを悟って、思わず愕然としてその花を手から取り落とすとき……、ああ、この心からの驚きこそ、私たちの魂が求め求めている、たった一つのもののなのです。そしてこの草花たちが可憐な唇をいっばいに開けて、人間に悟らせようと叫んでいた「神」という一語こそ、全人類の知恵が何よりも先に知らねばならぬ、たった一つのもののなのです。

野のありとあらゆる草花を、分類し、総合し、それに名前をつけたり、またその名前を暗記したりすることは、いわゆる植物学者にまかせておきましょう。そういう知識は、私たちの魂の成

「神は存在する！」と。
では皆様、来週まで さようなら。

長と充足とになんの関係ありません。ただ私たちに必要なただ一つの話は、一つの草花の中にも潜^{ひそ}み給うものを——科学者のメスの切り開く植物の生命の神秘の奥底に、じーっと私たちを見つめ、私たちから見い出されることを待ちわび給うものを——その一つのものを見い出して、そっと謙虚に口ずさむことです。

『神は存在するのだ！』と。

皆様、神が存在する！ ということが、やがて私たちの魂を満ち足らしめ、限りなくしあわせにしてくれるためには、もちろん、まだ、もっともっと「神」について知らねばならぬことがあります。けれど、野の草花の一つでさえもが、神の限りなき知恵と愛情とで、守られているということを知っただけでも、なんとなく、ほのぼのと明かるい希望が胸の底から湧き起こっては来ませんか？ ただそれだけで、なんとなく、生きているこの世の生命が姿を変えたようにはお思いませんか？

皆様、きょうも静かに暮れて行きます。人の世のさまざまな騒音も静まり、秋の夜がやって来しました。どうぞ、今夜、おやすみになる前に一度、目を閉じて静かに、そっと、次の一語を口ずさんでみていただきたいと思います。